

[シンポジウム] 「歴史語用論：その可能性と課題」

歴史語用論の成立と射程*

小野寺 典 子

This paper outlines the establishment and scope of the newly-recognized sub-field of linguistics, Historical Pragmatics. Following the introduction (1.), section 2 explores how the field has been newly recognized, and section 3 reviews the time periods (3.1.) and languages (3.2.) that have been the subject of research as well as the topics covered in this field (3.3.). Section 4 discusses the field's inherent concern, data limitation, and section 5 also introduces the two sub-approaches of Historical Pragmatics. Additionally, as a case study, a brief report of the intersubjectification of Japanese interjections is given (6.).

キーワード：歴史語用論・Historical Pragmatics・pragmaphilology・diachronic pragmatics・間主観化

1. はじめに

歴史語用論(Historical Pragmatics)は、ここ10年余りの間に、言語学の低位分野として位置付けられ、認識されるようになってきた研究領域である。いわゆる「語用論」において、以前から、言語の語用論的意味・機能の通時的变化、また人々の言語生活の通時的観察に、関心がなかったわけではなく、先行する研究も古くからあったと言うことはできる(例：Brown and Gilman 1960)。しかし、最近になってこの領域を「歴史語用論」と明示的に呼ぶようになった背景には、最近30年間の言語学で、特に文法化(grammaticalization)・主観化(subjectification)・間主観化(intersubjectification)といった、言語の語用論的意味の変遷に関わる歴史的言語変化のプロセスに大きな関心が集まるようになったことも一因だろう。

本論文では、2. 「歴史語用論」分野の成立、3. この分野が射程(守備範囲)とする時代区分(3.1.)、研究対象となってきた言語(3.2.)、トピック(3.3.)を概観し、また4. 「歴史語用論」の内在的な課題点と言える「データの制約」、5. 分野の低位区分としての2つのアプローチについて述べる。研究例として、6. 日本語の感動詞の意味変遷について報告し、

7. まとめたい。

2. 分野の成立

1998年第6回国際語用論会議 (International Pragmatics Conference) で行われたシンポジウム「歴史語用論」(Historical Pragmatics)において、オーガナイザー Andreas H. Jucker氏はこの新分野を次のように説明している。「歴史言語学の伝統的な方法論と、語用論において発達してきた方法論を組み合わせることにより、歴史的言語データの分析と言語の発達の分析に、明確な新たな視点を持って取り組もうとする」言語の新しい研究領域である。Historical Pragmatics という用語が初めて用いられたのは、同名の論文集 *Historical Pragmatics* (A. Jucker 編、1995 Benjamins)においてであり、用語の考案も Jucker氏によるものと思われる。冒頭の紹介論文の中で、「語用論における歴史的次元について、これまでにゲルマン語・ロマンス語研究においては議論されてきたが、未だ十分に議論されていない」ことに触れ (Jacobs and Jucker 1995: 4)¹⁾、新研究分野の設立にあたっては、分野の妥当性の議論も必要だとして、これを試みている。「語用論においては、[現在より]前の時代のコミュニケーションを、発話行為・含意・ポライトネス・談話標識といった語用論的現象を描写することにより、描くことが出来る」と、歴史語用論が行う研究の妥当性について述べている (ibid.: 5)。後で述べる *Journal of Historical Pragmatics* の各号の冒頭部分にも、分野の「目的と研究範囲」として「... 語用論・談話分析の視点に加え、より社会言語学・意味論的なアプローチの研究も含めるが、[収録される]論文の焦点は、常に言語の communicative use (コミュニケーションの中での使用)である」ことが述べられており、この分野が設立当初から“language in use” (ことば使用) を研究の中心と捉えている明確な姿勢が伺える。

1999年 ICHL (国際歴史言語学会) でも Historical Pragmatics と題したシンポジウムが行われ、そして、これまでの一つの成果として、2000年1月に *Journal of Historical Pragmatics* (Benjamins 社、年2回発行) が刊行された。その後も同名のシンポジウムは2002年 ICEHL (国際英語史学会)、2003年 ICHL でも開催が続いた。日本国内では、2005年12月の日本語用論学会大会 (於：京都大学) でのシンポジウム「歴史語用論：その可能性と課題」が初めてのものと思われる。

歴史語用論という呼び方はここ10年間のものだが、それ以前からあった同様の関心について触れておこう。前述のとおり、半世紀近くも前に Brown and Gilman (1960) は、印欧語の二人称代名詞 (T形/V形) の使い分けの変遷というテーマを取り上げている。西欧社会のイデオロギーの変化と共に、ことば使用が変化した様子を観察したもので、まさに歴史語用論のテーマと言える。その後もヨーロッパの T-V 使用についての通時的・語用論的研究は続き、今日に至る (Jucker and Taavitsainen 2003 に収録の論文, Ashby 1992 他)。

また、ドイツ語圏の言語学研究において、遅くとも1970年代後半にはこの研究領域への関

心が見られ、その後のドイツ語史研究に生かされているという²⁾。1978年にチューリッヒで「語用論的言語史へのアプローチ」と題するコロキウムが開催されたが、報告者の一人 Dieter Cherubim は、このような立場をドイツ語で「歴史語用論」(historische Sprachpragmatik)と呼んだ。G. Leech が、「協調の原理」「丁寧さ」などが「文化」「言語社会」「社会的場面」「社会階層」などが違えば、「違った形で働く」(池上・河上訳 1987:15) ことに興味を持つ方向性を、「社会語用論」(Sociopragmatics)と呼んだのに呼応して、Peter von Polenz (1991)以降、ドイツ語史記述においては今日に至るまで「社会語用論」的視点が重視されてきた(高田 2005:8)。こうした社会語用論的言語史記述は、より抽象度の高い歴史語用論と重なり合う部分が多く、今日までに相当数の研究が蓄積されている。

そこへ1. でも述べたとおり、最近30年の言語学における文法化・主観化といった歴史的言語変化の研究が大きな関心を集めるものとなり、歴史語用論研究がより明確な一領域として認識されるようになっていったと考えられる。

3. 分野の射程

歴史語用論の射程を捉えるために、ここでは2000年の創刊から7年目を迎えた *Journal of Historical Pragmatics* の掲載論文・特集号を概観し、研究対象となってきた時代区分(3.1.)・言語(3.2.)・トピック(3.3.)をまとめてみたい。

3.1. 時代区分

歴史語用論では、いつ頃の言語を見ているのだろうか。研究される「時代」に、傾向はあるのだろうか。研究論文を観察してみた。英語を例に取り、時代区分に分けると下のようになる。

時代区分 (例: 英語)

| | |
|-------------|------------|
| OE (古期英語) | 約 7-11C まで |
| ME (中期英語) | 約 15C 末まで |
| ModE (近代英語) | 16C 以降 |

いつ頃の言語を取り上げるかは、*Journal of Historical Pragmatics* の初期、最近を見ても変わりが無い。論文によって、古期から現代に至るまで網羅的に扱ったり、古期のみ、また古期から中期にかけて扱う、世紀で区切って(17Cのみ、19-20Cのみ等)言語を観察するなど、研究によって「時代の切り取り方」は様々だと言える。古いことばも、最近のことばも対象となっていることがわかる。

やはり、言語形式によって、実際に言語に現れている期間が異なる為、見ようとする言語形式、取り上げるトピックによっても、どの期間のことばが対象となり、分析されるかが決

まるのだろう³⁾。

3.2. 言語

Journal of Historical Pragmatics は、2006年10月現在、創刊1.1号から計14誌が発行された。1.1号から4.2号(2003年)までの前半8誌と、それ以降の最新6誌(2004-06年)を比べてみると、雑誌の傾向は多少なりとも変わってきている。2003年までの8誌では、個々の論文で研究対象となった言語は圧倒的に英語が多く、全論文の85%以上を占める。他に分析対象となった言語は、スペイン語、ドイツ語(オーストリアのドイツ語)、オランダ語、フランス語、ヴェーダ語(紀元前1000年頃の言語)⁴⁾と日本語である。前半で非印欧語を分析した論文は1本のみ(Onodera 2000で日本語を対象とした)であり、それ以外は英語を大半とした印欧語(インド・ヨーロッパ語族)の研究で全てを占める⁵⁾。

この雑誌の2004-2006年の最新6誌を見てみると、扱う言語の傾向は多少異なってきた。全論文中、英語を分析したものは46%と減少し、他は、新しく登場したイタリア語・ポルトガル語・スウェーデン語・キプロスのギリシャ語・東スラヴ語・ロシア語・古ポーランド語・中国語と、引き続きフランス語・スペイン語・日本語である。6誌中、中国語を扱った論文1本、日本語の論文(明治期の言文一致体成立について)1本を除くと、バラエティは見られるようになったものの、やはり印欧語という1つの語族に属する個別言語の研究で占められる。

印欧語は、地球上の分布地域が広範囲で、話し手数も約20億人と地球総人口の約半数を占め、かつ、歴史的言語研究にとって重要な、豊富な書記文献を4000年に渡って持っている(田中編1997:300-301,746)。こうしたことから、印欧語族が比較言語学の模範と呼ばれてきたが、やはり、歴史語用論研究も、主にヨーロッパの研究者によって、この語族の研究から火がついたと言えそうである。

3.3. トピック

3.3.1. *Journal of Historical Pragmatics* 掲載論文のトピック

歴史語用論分野の初期にあたる1998年の国際語用論会議でのパネル「歴史語用論」では、「発話行為の通時的分析」・「談話標識の歴史的発達」・「データの問題」といったトピックが各セッションで取り上げられた。

また、*Journal of Historical Pragmatics* にこれまで掲載された論文のトピックを概観してみよう。前半2003年までは、歴史的言語データを素材に考察されたトピックは、「発話行為、談話標識、ポライトネス・ストラテジー、face work、Griceの公理、推量(inference)、間接表現、モダリティ、informal language、subjectivity・intersubjectivity、人称代名詞(1人称か2人称か)の変異、2人称代名詞(英語のye/thou)の変異」などである。これら

は、いわゆる語用論分野 (pragmatics、共時的) で私達がこれまで扱ってきたトピックである。新しいものではジャンル分析をした論文もあった。歴史語用論で扱うトピックとは、これまで言語の語用論的側面として捉えてきた言語形式・ことばの用法・モデルなどを、今度は時間的経過の中でどのように変遷また発達するかを見ることと言えそうである。

ジャーナルの最近3年間(2004-2006年)の傾向は、やはり、初期と変わらず、発話行為の変遷・語用論化・文法化といったトピックの研究が、多くの論文で報告されている。新しい傾向としては、東アジア言語である中国語の文法化・日本語の「明治期の言文一致体成立について」といった論文の登場と、pragmaphilologyによる特定時代の特定地域の言語生活の解明であろう。宗教的説教などに見られる概念の歴史的観察といった論文もあった。Pragmaphilologyについては、5.1.で説明するが、下記の特集号「手紙」で大変興味深い論文内容が見られる。

3.3.2. *Journal of Historical Pragmatics* 特集号のトピック

これまでに特集号は5誌出ている。トピックは「メディアと言語変化 (media and language change) (4.1号、2003年)」、「儀式的言語行動 (ritual language behavior) (4.2号、2003年)」、「手紙 (letter writing) (5.2号、2004年)」、「Pragmatic markers の発達 (6.2号、2005年)」、「歴史的・法廷のディスコース」(7.2号、2006年)であった。また、7誌目として「日本語の歴史的変遷：主観性と間主観性を中心に」(Historical changes in Japanese: Subjectivity and intersubjectivity (8.2号、2007年 Onodera and Suzuki. In press) が予定されている。

特集「手紙」では、文法化や主観化に代表される「言語変化」とは異なり、より社会言語学的な歴史的言語分析が2本の論文、Tiisala (2004)と Valle (2004)に見られる。この2本の論文は、歴史語用論の中では5.1.で述べる pragmaphilology に分類されると思われる。Tiisala (2004) (“Power and politeness: Languages and salutation formulas in correspondence between Sweden and the German Hanse”) は、中世ヨーロッパの北バルト地方を舞台になされた、スウェーデンの権力者達とドイツのハンザ同盟都市商人の間の手紙のやりとりを、希少な資料を分析して再現している。当時北バルト地方では、ラテン語・低地ドイツ語 (Low German) ・スウェーデン語の3言語変種が書きことばに使用されていたが、この論文では、当時の「力関係」が、言語変種の選択・ていねい表現・呼称・相手を表す形容詞・敬意や躊躇を表す副詞の用法などに、どのように表れているかを細かく分析している。結果として、言語変種間の借用の様子、低地ドイツ・スウェーデン語が、手紙の書き方をラテン語から採用していることが描かれ、また、バルト地方でのハンザ同盟の支配的立場が、書簡のやりとりの中での低地ドイツ語の最も優位的立場に反映されていると結論付けている。社会と言語使用の相関関係が、歴史的言語データから如実に読み取れることを示している。

Valle (2004) (“The pleasure of receiving your favour: The colonial exchange in eighteenth-century natural history”)も、特定の時代のある地域の人々の社会生活のありさまを、歴史的データから読み取り、再現した例である。タイトルが示すとおり、18世紀の英国と北米間で行われた通信を、植民地時代のやりとり (colonial exchange) と位置付けている。北米からは、原料 (植物・動物の見本) とそれらを表す名前の提案が送られ、本国からは「成文化された科学知識・名称・分類」が出版物 (本や雑誌) の形で返された、とある。最後に、ここで観察した「博物誌」(natural history) の通信は、(友情の行き来とともに) 当時の英国-北米の間の共同社会 (community) 形成の様子を見せてくれたと結論付けている。現在に残された歴史的言語データから、過去の言語社会の姿が再現され、克明に報告された例だろう。

ここでまた1960年に書かれたBrown and Gilmanの“The pronouns of power and solidarity”に触れるが、この研究は、印欧語における二人称代名詞 (T形-V形) 使い分けの変遷を観察した先駆的研究だろう。ヨーロッパが封建社会から平等主義的社会へとイデオロギーが移行するのに伴い、T-V使い分けを司る要因が社会的力関係 (power) から人と人との距離感 (solidarity) へと移行する様を描いている。特にドイツ・フランス・イタリア社会のイデオロギーのちがひ、国民性のちがひにも言及した。上記のTiisala (2004)とValle (2004)といった論文とともに、歴史語用論の中でもより社会言語学的な歴史的言語分析は、過去の社会・文化そしてイデオロギーの変遷までも浮き彫りにできる可能性があることを示している。

特集「Pragmatic markersの発達」(6.2号、2005年)では、編者Hansen and Rossariが「歴史語用論では、英語以外の言語の研究が少ない」(180-181)ことを指摘し、先述のとおり、英語以外の印欧語 (イタリア語・スペイン語・ポルトガル語・スウェーデン語・ケベック仏語・キプロスギリシャ語) をデータとした論文7本を集めている。

2007年8.2号に予定されている特集「日本語の歴史的変化：主観性と間主観性を中心に」では、2005年7月、国際語用論会議で行われた同名のパネルでの発表をまとめた論文6本⁶⁾が掲載の予定である (Onodera and Suzuki (eds.) In press)。日本語に見られる文法化・主観化・間主観化についての報告および理論的考察や、韓国語との対照研究からの考察などがなされるだろう。

Journal of Historical Pragmatics の7年間のトピックを概観することで、この分野のトピックを眺めてみたが、歴史語用論の守備するトピックは、(1) 文法化・意味変遷などの「言語そのものの変化の研究」(language change) とともに、(2) 「より社会言語学的」視点から、過去の時代の人々の社会生活を、ことば使用から浮き彫りにする研究まで含んでおり、広範囲である。歴史語用論は、1つ1つの言語形式・機能の変遷がどう進むかという興味深いトピックと共に、人の社会生活・言語行動の歴史をリアルに再現する可能性も持っていると言えるだろう。

4. 分野の課題点

4.1. データの制約

歴史語用論を、簡潔に言えば、歴史言語学と語用論の方法論を組み合わせたアプローチであると、2. の冒頭で述べた。ここでは、歴史言語学と語用論が用いてきたデータの性質の異なりから、必然的に生じる問題点について触れる。歴史語用論が、分野として、内在的に持つ問題点と言える。

歴史言語学（通時的言語研究）では、現代語以前の言語データは必ず「書きことば」を用いなければならない。20世紀以前には、オーディオまたビデオによる録音技術がなかった為、過去の話しことばについては、直接聞いたり、文字化して分析することが不可能だからである。一方、語用論は、特に1980年代に発達した「話しことば」の研究⁷⁾とともに発展を続けているとも言え、言語の語用論的側面の分析にとって、話しことば分析から得るものが大きいということは、広く認知されてきたと言えよう。歴史語用論では、現代語の話しことば分析はできて、過去の言語については、書きことばをデータとするしかないという制約があるのである。つまり、歴史語用論のデータの問題とは、古い時代の話しことばへの興味は尽きないが、データの制約があるため、何を自然な言語データとして用いるか、ということが常に問題点となる、ということである。（そこには例えば、話しことば vs. 書きことばというジレンマから、*orality vs. literacy* の対立といった問題性も常に出てこよう。）

歴史語用論で実際にデータとするのは、“written records of spoken language”（話しことばの書いた記録）（Jacobs and Jucker 1995: 7）である。文学作品の中の台詞・対話の部分、手紙、遺言書、外国語教育の教科書（対話の部分）、演劇の脚本、詩（ballad等）など、話しことばを反映していると考えられる書きことばを、見たい時代の言語データとして用いるということである。しかし、歴史語用論では、上記のデータの制約を、制約とは捉えずに、そこから積極的にコンテキスト・語用論的意味・機能を読み取ろうとする。そして、この分析方法を有効だと考えている（*ibid.*: 10 など）姿勢が認められる。

4.2. 「データの制約」についての「歴史語用論」分野の考え方

上のデータの性質に対し、今は幅広く使われるようになった英語の Helsinki Corpus 編纂にも関わった Rissanen (1986) が、次のように考えを述べている。「話しことばの書いた記録」分析の有効性を説く。

It is plausible to suggest that *written records of spoken language* are closer to the actual spoken language of the time than written language not based on spoken language. Features that are consistently more frequent in *records of spoken language* than in written language proper can fairly safely be hypothesized to be even more frequent in the spoken language of that period (cf. Rissanen 1986.

Jacobs and Jucker 1995:7 より引用。)

(「話しことばの書いた記録」は、話しことばを反映していない、いわゆる書きことばより、その時代の実際の話しことばに近い、と考えてよいだろう。書きことばよりも「話しことばの記録」に一貫して見られる特徴は、その時代の実際の話しことばにはもっとよく見られる特徴だ、と言ってもかなり安全な仮説となろう。)⁸¹⁾

歴史語用論では、データについてこのように考え、「話しことばの書いた記録」をデータとして見ることを妥当と考えている。

5. 歴史語用論の下位区分——2つのアプローチ

Jacobs and Jucker (1995: 10-25)は、過去の言語状況の語用論的研究に、現在2つのアプローチが認められるとし、説明している。すなわち歴史語用論の2つの下位区分、Pragmaphilology (5.1.)と Diachronic pragmatics (5.2.)である。以下で、Jacobs and Jucker (ibid.)をもとにこの2つを紹介したい。

5.1. Pragmaphilology (語用論的歴史言語学)

歴史言語学では、伝統的に音韻変化の解明に努力が傾けられ、音韻・形態面が注目されてきた。意味・統語的側面は軽視されてきたと言う。一方、pragmaphilologyでは一步踏み込んで、歴史的テキストのコンテクスト—すなわち送り手・受け手の社会関係、人間関係、テキストとその時代の社会状況との関わり、テキストの目的などを描く。具体例を挙げると、Betten (1990)は、ルター訳の聖書と初期近代ドイツ語による散文(特に音読された時)は、中世の話しことばの特徴とされるものをよく含んでいると言う。4.1.でデータの問題(書きことば性 vs. 話しことば性)に触れたが、この論文では、その当時の書きことば・話しことばの相似性を報告している。他の例には、Journal of Historical Pragmatics 特集号(2004年5.2.号)「手紙」のTiisala (2004)と Valle (2004)がある(3.3.2.を参照されたい)。Pragmaphilologyは語用論的歴史言語学と訳せるが、テキストの送り手・受け手関係や、当時の時代背景・社会的状況・人々の言語生活を克明に描き出し、論文にはかなり社会言語学的な性質のものも見られる。

5.2. Diachronic pragmatics (通時的語用論)

共時的対照語用論では、言語形式・機能と用法が、異なる言語ではどう違ってくるかを調べるのに対し、通時的語用論では、言語形式・機能と用法が同一言語の異なる時期でどう違うかを見る。この領域は、さらに2つに分かれる。Diachronic form-to-function mapping (5.2.1.)と Diachronic function-to-form mapping (5.2.2.)である。

5. 2. 1. Diachronic form-to-function mapping

このアプローチでは、個々の言語形式の語用論的意味の出現と通時的変遷を追う。言語形式は例えば談話標識・関係代名詞・語彙項目等である。これまでの研究の具体例は、古英語から中英語にかけての語順変化、Traugott (1989)等による一連の文法化・主観化・間主観化の研究、古英語のダイクシス (here, now に当たる語) の分析、初期近代英語と近代英語の指示詞 (this, that) の比較、接続詞や副詞の発達・談話標識の発達等である。最近 30 年間の「文法化・主観化」研究の発達は前述のとおりだが、文法化・主観化も歴史語用論ではここに分類される。

談話標識の歴史的発達のテーマもこれまでに数多く研究されてきた。英語では、Traugott (1995a)や Brinton (1996)らにより、多くの談話標識の発達・変遷が文法化現象と関連づけられて、研究が進められている。また Taavitsainen (1994)の、後期中英語の感嘆を表す談話標識の前景化・turn-taking を表す機能の考察、Stein (1985)の三人称単数現在直説法の末尾 (s か th) の使い分け、Finell (1992)の 17 世紀半ばからの話題転換詞 (well, now, by the way 等) の発達などの研究がある。ドイツ語では、Burger (1980)による 17 世紀以降のテキストに現れた感嘆詞の研究などがある。また日本語では、談話標識の意味・機能変遷の分析 (Mori 1996, Onodera 2004)、pragmatic marker 「わけ」の発達の分析 (Suzuki 1999) などがある。

5. 2. 2. Diachronic function-to-form mapping

このアプローチでは、5.2.1.とは逆に、言語の機能面に最初に着目し、その具現化の変遷を追う。例えば、発話行為やポライトネス機能を、言語の発達の複数の段階で、どのように実現されているかを見る。具体例として Arnovick (1994) は、現代英語と古英語の詩に見られる「約束」(promise)の語用論的様相のちがいを分析した。また、Lötscher (1981)は 15～16 世紀のスイスドイツ語の「ののしり」(swearing) や「侮辱」(insults) が、社会文化的要因と結びついて表現の仕方が変化することを示した。発話行為の通時的分析は、1つの機能と捉えても、機能自体が時間的経過の中で変わる場合もあり、複雑であるが、ヨーロッパを中心として先行研究が大変多く、今も続けられている。

ポライトネスの歴史については、Watts et al. (1992)の研究があり、また、Brown and Gilman (1989)は Brown and Levinson (1987)の politeness 理論をシェイクスピア悲劇に適用し、「距離・力・(面子威嚇の) 度合い」という要素について考察した。Kopytko (1993)はシェイクスピアの悲喜劇を分析し、英国の相互作用スタイルが positive なポライトネスから negative なポライトネス重視の文化へと移行したと論じた。(シェイクスピア作品も、歴史語用論ではテキストとしてよく用いられている。)

6. 日本語の研究例（「な」要素の間主観化）

5. まですで「歴史語用論」分野の紹介をしてきたが、最後に研究の一例として日本語の「な」要素の間主観化の様子を、紙幅の関係からごく大まかに報告したい⁹⁾。

森田（1973）は論文「感動詞の変遷」の中で、中世の「な・なあ・なう・なうなう」等「ナ系統の感動詞」の成立について、もともと「終助詞が切り離されて独立句をなし、文頭に立つようになったもの」（197）と述べている。また、これらの語が引き続き近世も用いられ、「な系統の音転として『ね』『ねえ』の形が江戸ことばで使われた」と報告している（197）。「ね・ねえ」は現代日本語の会話でも頻繁に用いられる相互作用的な性質が強い言語形式である。

Onodera（2004）は、上の森田（1973）の分析を基盤に、文末・文中・文頭の「な」要素（な・なあ・なう・なうなう・ね・ねえ）が、8世紀から現代までの長期にわたり、どのような変遷を経てきたかを観察した。統語的位置（形式）の変化としては、まず文末（発話末）か文中に現れ、後に文頭（発話頭）へ現れる。そして意味機能の変化として、「自己に向けた意味」から「他者へ向けた意味」へ移行する様子が観察された。Onodera（In press）では、この意味機能の変遷を、主観性（subjectivity）と間主観性（intersubjectivity）（特に間主観性）に照らして分析したが、「な」要素は、他の多くの言語でも観察されている間主観化プロセスを経ていると考えられる。まず第一に、終助詞に見られる主要な意味は（1）「詠嘆」だが、感動詞（発話頭）の主要な意味は（2）「呼びかけ」である。例の提示は他稿に譲らざるを得ないが、（1）詠嘆が、他人に伝えるという意図を伴わない「自らの内なる世界での、感情の吐露」であるのに対し、（2）呼びかけは、明確な「他者とのコミュニケーションにおいて必要な対者ストラテジー」となっている。主観的→間主観的へという間主観化が認められる。第二に、「な」系統の終助詞（発話末）に限れば、もともと「詠嘆」用法のみ見られた（8世紀）が、後（18世紀）に、聞き手の「受信の確認」、自分のメッセージへの「同意を促す」という、より相手の主観性に働きかける機能が現れる（主観的→間主観的）。第三に、感動詞に限れば、「呼びかけ」（12世紀）という基本的な対者ストラテジーに加え、14世紀には「これから情報提示することのアナウンス」「念押し」という、聞き手の主観性に対するより細やかな配慮が見られるようになる。これは間主観的な意味が、間主観性を強めたという点で間主観化に当たる。第一の間主観化プロセスは、特に日本語の多くの感動詞にもあてはまることが、国語学者たちによって論じられてきたものである。

7. まとめ

「歴史語用論」の射程を、方法論なども含め概観してきた。この領域は、他の言語学の下位分野、（例えば）生成文法や最近の構文理論などのように、核となる理論を皆が追いかけるといったまとまり方というより、射程はより広範囲である。言語そのものの変化も見れば、過

去の社会言語生活も解明できる。

分野としては、特に英語中心の印欧語研究からスタートしたと言えそうだが、最近はこの傾向も脱却すべく、非印欧語の研究もなされてきている。やはり、今後の展望として、言語・言語使用の普遍性を探求するには、性質の異なる数多くの言語の研究から貢献できることが多いのではないだろうか。言語の表出性や間主観性といった点を考えても、より多くを表現する言語があると指摘されている。最近注目を集める敬語体系を持つ、日本語・韓国語はまさにそうした言語だとされる。間主観化や文法化を見ていく上でも、敬語をはじめとした表出性の高い表現を豊富に含むそうした言語は、この領域においても宝庫といえる言語データを提供してくれそうである。

注

*本稿は、2005年12月、日本語用論学会第8回大会シンポジウムで発表した内容に加筆したものである。オーガナイザー金水敏先生、参加されたフロアの皆さまから貴重なご意見を頂戴しました。また本稿の草稿をお読み下さった高田博行先生・新里瑠美子先生からも多くの示唆的なコメントを頂きました。ここに御礼申し上げます。

- 1) 本稿では、主に英語で書かれた原文を和訳して引用する。
- 2) ドイツ語圏の言語学研究については、学習院大学・高田博行先生より御教示頂いた。御礼申し上げます。
- 3) 例えばトピック「メディアの発達と言語」(Journal of Historical Pragmatics 4.1.特集号)では、言語データは15世紀(印刷の発明)から21世紀(オンライン新聞)まで見ていた。
- 4) 印欧語比較文法研究に重要とされ、後にサンスクリット語に発展した(Staal 2003:208)。前半8誌で2本の論文の研究対象となっている。
- 5) 歴史語用論で英語の分析が多いことの1つの理由を、鳥取大学・福元広二氏は「やはり、1991年に完成したHelsinki Corpus of English TextsやCorpus of Early English Correspondenceといったコーパスができたことが大きい」と指摘された(2005年度日本語用論学会大会「歴史語用論」シンポジウムに於いて)。
- 6) パネル発表者の新里瑠美子氏・ハイコ・ナロック氏・鈴木亮子氏・小野寺と、ディスカッサントElizabeth Traugott氏・堀江薫氏の各論文。
- 7) Discourse Analysis(談話分析)やConversation Analysis(会話分析)が見られる。
- 8) 英文の原文中のイタリック体と和訳は筆者が行った。
- 9) 詳しくはOnodera(In press)を参照頂ければ幸いである。

参考文献

- Arnovick, L. 1994. "The Expanding Discourse of Promises in Present-Day English: A Case Study in Historical Pragmatics." *Folia Linguistica Historica* 15:1-2, 175-191.
- Ashby, W. 1992. "The Variable Use of *On* versus *Tu/Vous* for Indefinite Reference in Spoken French." *Journal of French Language Studies* 2, 127-145.
- Betten, A. 1990. "Zur Problematik der Abgrenzung von Schriftlichkeit und Mündlichkeit bei mittelalterlichen Texten". In A. Betten (ed.) *Neuere Forschungen zur historischen Syntax des Deutschen*:

- Referate der Internationalen Fachkonferenz Eichstätt 1989. (Reihe Germanistische Linguistik 103), 324-335. Tübingen: Niemeyer.
- Brinton, L. 1996. *Pragmatic Markers in English: Grammaticalization and Discourse Functions*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Brown, R. and Gilman, A. 1960. "The Pronouns of Power and Solidarity." In T. Sebeok (ed.) *Style in Language*, 253-276. Cambridge, MA: MIT Press.
- Brown, R. and Gilman, A. 1989. "Politeness Theory and Shakespeare's Four Major Tragedies." *Language in Society* 18:2, 159-212.
- Burger, H. 1980. "Interjektionen." In H. Sitta (ed.) *Ansätze zu einer pragmatischen Sprachgeschichte. Zürcher Kolloquium 1978*. (Reihe Germanistische Linguistik 21), 53-69. Tübingen: Niemeyer.
- Brown, P. and Levinson, S. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Finell, A. 1992. "The Repertoire of Topic Changers in Personal, Intimate Letters: A Diachronic Study of Osborne and Woolf." In M. Rissanen, O. Ihalainen, T. Nevalainen and I. Taavitsainen (eds.) *History of Englishes: New Methods and Interpretations in Historical Linguistics*, 720-735. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Hansen, M-B. M. and Rossari, C. 2005. "The Evolution of Pragmatic Markers: Introduction." *Journal of Historical Pragmatics* 6:2, 177-187.
- Jacobs, A. and Jucker, A. H. 1995. "The Historical Perspective in Pragmatics." In A. H. Jucker (ed.) *Historical Pragmatics*, 3-33. Amsterdam: John Benjamins.
- Jucker, A. H. (ed.) 1995. *Historical Pragmatics*. Amsterdam: John Benjamins.
- Kopytko, R. 1993. *Polite Discourse in Shakespeare's English*. Poznan: Wydawnictwo Naukowe UAM.
- Leech, G. N. 1983. *Principles of Pragmatics*. London: Longman. [池上嘉彦・河上誓作 (訳). 1987. 『語用論』東京: 紀伊国屋書店.]
- Lötscher, A. 1981. "Zur Sprachgeschichte des Fluchens und Beschimpfens im Schweizerdeutschen." *Zeitschrift für Dialektologie und Linguistik* 48, 145-160.
- Mori, J. 1996. "Historical Change of the Japanese Connective *Datte*: Its Form and Functions." In N. Akatsuka, S. Iwasaki, and S. Strauss (eds.) *Japanese/Korean Linguistics* 5, 201-218. Stanford, CA: CSLI Publications.
- 森田良行. 1973. 「感動詞の変遷」、鈴木一彦・林 巨樹 (編) 『品詞別日本文法講座 6 接続詞・感動詞』178-208. 東京: 明治書院.
- Onodera, N. O. 2000. "Development of *Demo* Type Connectives and *Na* Elements: Two Extremes of Japanese Discourse Markers." *Journal of Historical Pragmatics* 1:1, 27-55.
- Onodera, N. O. 2004. *Japanese Discourse Markers: Synchronic and Diachronic Discourse Analysis*. Amsterdam: John Benjamins.
- Onodera, N. O. (In press) "Interplay of (Inter)subjectivity and Social Norm." In N. O. Onodera and R. Suzuki (eds.) *Special Issue — Historical Changes in Japanese: Subjectivity and Intersubjectivity*. *Journal of Historical Pragmatics* 8:2.
- Onodera, N. O. and Suzuki, R. (eds.) (In press) *Special Issue — Historical Changes in Japanese: Subjectivity and Intersubjectivity*. *Journal of Historical Pragmatics* 8:2.
- Polenz, P. von. 1991. *Deutsche Sprachgeschichte vom Spätmittelalter bis zur Gegenwart*. Vol. 1.

- Berlin/New York: Walter de Gruyter.
- Rissanen, M. 1986. "Variation and the Study of English Historical Syntax." In D. Sankoff ed. *Diversity and Diachrony*, 97-109. Amsterdam: John Benjamins.
- Staal, F. 2003. "Simultaneities in Vedic Ritual." *Journal of Historical Pragmatics* 4:2, 195-210.
- Stein, D. 1985. "Discourse Markers in Early Modern English." In R. Eaton et al. (eds.) *Papers from the Fourth International Conference on English Historical Linguistics*, 283-302. Amsterdam: John Benjamins.
- Suzuki, R. 1999. *Grammaticization in Japanese: A Study of Pragmatic Particle-ization*. Ph.D. Dissertation, UC. Santa Barbara.
- Taavitsainen, I. 1994. "Interjections in the Late Middle English Period." Paper Read at the International Conference on Middle English Language. Rydzyna, 13-16 April 1994.
- Taavitsainen, I. and A. H. Jucker (eds.) 2003. *Diachronic Perspectives on Address Term Systems*. Amsterdam: John Benjamins.
- 高田博行. 2005. 「アーデルングの『高地ドイツ語辞典』— 18世紀における言語的日常生活の意味論—」、飯嶋一泰 (編) 『ドイツ語辞書の歴史と現在』 (日本独文学会研究叢書 038) 1 - 15. 東京: 日本独文学会.
- Tiisala, S. 2004. "Power and Politeness: Languages and Salutation Formulas in Correspondence between Sweden and the German Hanse." *Journal of Historical Pragmatics* 5:2, 193-206.
- 田中春美他 (編) 1997. 『現代言語学辞典』東京: 成美堂.
- Traugott, E. C. 1989. "On the Rise of Epistemic Meanings in English: An Example of Subjectification in Semantic Change." *Language* 65:1, 31-55.
- Traugott, E. C. 1995. "Subjectification in Grammaticalization." In D. Stein and S. Wright eds. *Subjectivity and Subjectivisation*, 31-54. Cambridge, Cambridge University Press.
- Valle, E. 2004. "The Pleasure of Receiving Your Favour": The Colonial Exchange in Eighteenth-Century Natural History." *Journal of Historical Pragmatics* 5:2, 313-336.
- Watts, R. J., Ide, S., and Ehlich K. (eds.) 1992. *Politeness in Language: Studies in Its History, Theory and Practice*. Berlin: Mouton de Gruyter.